

桜の季節に前田陽一監督を偲ぶ

龍野では、3月31日にさくら祭りが開催される予定です。

私ごとで恐縮ですが、さくら祭りの日は父の命日であり、本日は、父の龍野高校の同級生で、生前、父と親しく交流のあった映画監督の前田陽一氏について語りたく存じます。

前田陽一（1934－1998）は、生家が龍野の下川原で新聞販売業を営んでいたとされ、龍高から早稲田を出て松竹に入り、1964年に映画監督としてデビューしました。前田は、早大時代に龍高同窓生と同人誌「酩酊船」を創刊した後、1957年には「姫路文学」に唯一の小説「枇杷の木刀」を発表し、また短編映画「播磨のこころ」を制作した所為か、姫路文学館には前田監督の展示が設けられています。

前田陽一は、監督デビューしてから、多くの喜劇映画やTVドラマを監督し、代表作「神様のくれた赤ん坊」により文化庁奨励賞やヨコハマ映画祭特別大賞を受賞し、日本の映画史に確かな足跡を残しました。龍野では1976年に山田洋次監督の「寅次郎夕焼け小焼け」のロケがありましたが、この背景には、前田陽一の影響があったとされています。

福崎出身の民族学者、柳田國男が故郷の思い出を綴った「故郷70年」の様に、前田陽一も、没後、2003年に「含羞のエンドマーク」という遺稿集が出版され、此には龍野への熱い郷愁が込められています。

この本は、龍野の山河や町並み、老舗や料亭、醤油、素麺の伝統産業、赤とんぼや揖保川の鮎等の風物詩、そして、交流のあった人々や市政40周年での記念講演、「龍野の四季とうすくち醤油」という映画製作など龍野での様々な思い出に溢れています。亦、この本では、前田の「住む土地の景観が人間の心に大きな影響を与える」という考えが示され、「龍野の貴重な建物をうまく利用して町並みの再生を図るのが龍野の今後の課題」と唱えています。これは龍野が2019年に重伝建地区に指定されたことで、半ば実現しつつある様に思います。

前田陽一の監督人生は、「枇杷の木刀」の桜祭りの描写に始まり、晩年の「サクラサクラ」に至るまで春の龍野の様に桜が匂い立つ人生でした。「見納めになるかも知れぬ春に居り」これは前田が横浜で詠んだ句ですが、前田は、揖保乃糸が東京のデパートで買える様になった時、大層喜んだというエピソードがあり、東京に暮らしても、故郷龍野を生涯忘れることがなかった人生であったことが伺えます。

前田のいた頃は、龍野は文化的雰囲気満ちていた様ですが、最近は薄れつつあると感じます。龍野の町並み再生の兆候が見られる今こそ、次世代につながる龍野の文化の再興を期待する次第です。